宮尾登美子

春のさきもの巡礼

文藝春秋

著者略歴

大正十五年高知生れ。高知市高坂高女卒。昭和五十四年「一絃の琴」で第八十回直木賞受賞。主なる作品に「櫂」「陽暉楼」「岩伍覚え書」「鬼龍院花子の生涯」「伽羅の香」等がある。

美しきものへの巡礼

昭和五十六年九月十日　第一刷

定価千四百円

著者　宮尾登美子

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五―一二一一

印刷　凸版印刷

製本所　矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Tomiko Miyao 1981　Printed in Japan

目
次

てまり……7
伊賀の表具屋さん……21
ゆびわ……35
ケーキ……49
市松人形……63
吹きガラス……77

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

打ち上げ花火……91
竹細工……105
ハンドバッグ……119
呉服やさん……133
菊作り……147
古代塗……161

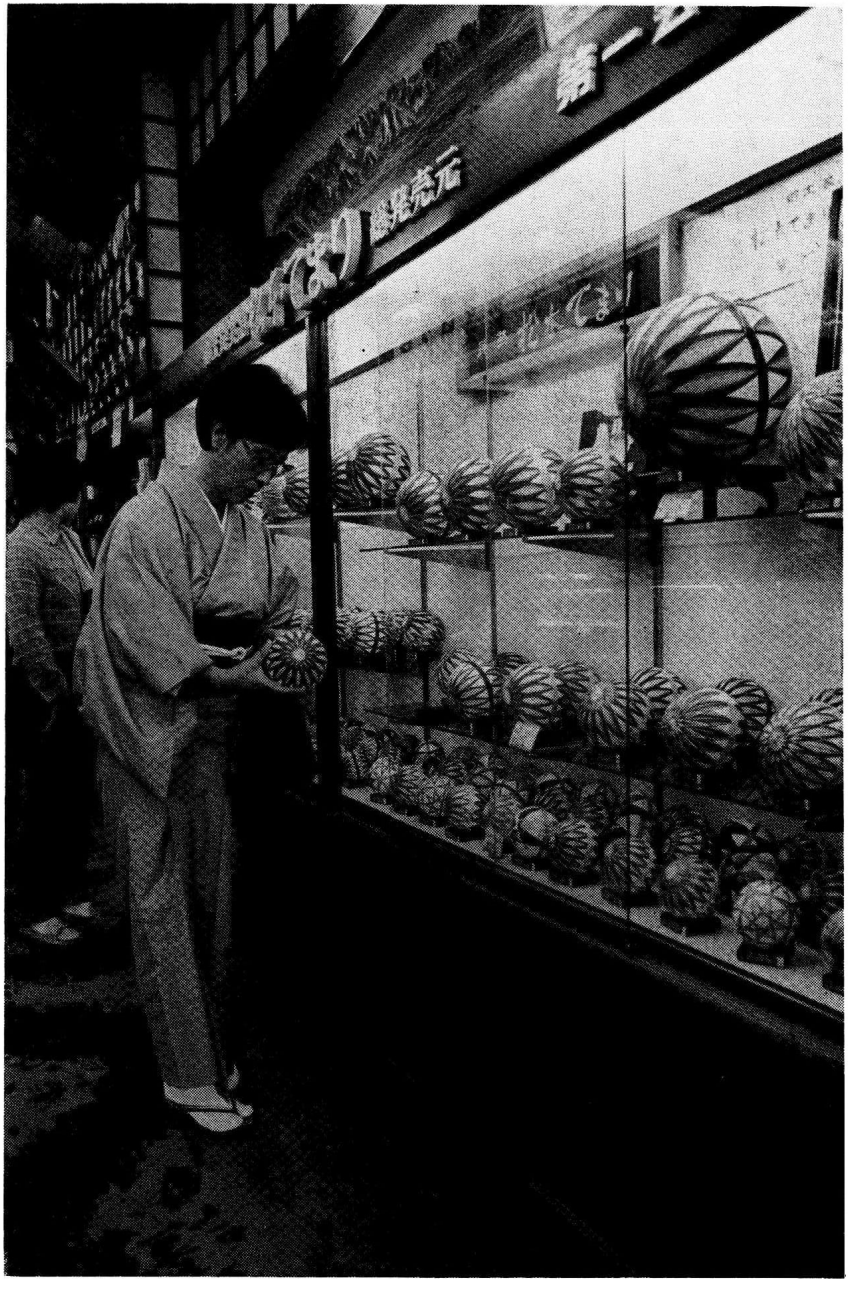
題字　著　者

装幀　磯谷時子

写真　渡辺直之

山崎陽一（「伊賀の表具屋さん」）

美しきものへの巡礼



てまり

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

私が子供の頃を過した戦前の土佐の下町には、すぐ近くに南海一といわれる大きな料亭があった。何しろ部屋数百にあまる広い建物だったから、妓楼特有の気味のわるい話もあり、そのなかに小さな「開かずの間」があったという。

ここは昔、まだ十歳の芸者の仕込みっ子が、てまりをつきたさに芸の稽古に身を入れず、そのために連日の折檻に会った挙句、血を吐いて死んだといわれる部屋で、夜半になると必ずとんとん、という、てまりをつく音が聞えてくるそうであった。その話を私が聞いたのは、たぶん十歳前後ではなかったろうか。

その頃私はゴムまりに熱中していて、学校から帰ると鞄をほうり出し、日の暮れるまでゴムまりをついて遊んだものだった。

ゴムまりを土佐ではゴム玉といい、大きさによって号数が打ってあり、子供の掌でちょうどつきやすいものは五号か、五号半の直径十七、八センチくらいのものではなかったかと思う。ゴム玉は板の間よりもコンクリートの床がもっと弾み、つきかたもお手返しやら足の間をくぐらせたり、さまざまの高等技術をおぼえればおぼえるほど面白かった。

てまりをつきたさに打たれて死んだという仕込みっ子の話は、同年輩だっただけに子供心に大きな衝撃を受け、私はその夜、おそろしくまた悲しくてなかなか寝つけなかった。

てまりをつく子供の幽霊は、あの世へ行ってまでもなおてまりをつきたいのだと思うとかわいそうで涙があふれ、そしてそのてまりは、昔のことだからきっと我々のようなゴム玉でなく、糸でかがったものではなかったかと考え続けるのである。

というのは、その頃私の家には八十歳を過ぎた祖母が居り、「ものは節約に、節約に」が口ぐせのこの祖母は、着物の解き糸といえども決して捨てず、それで雑巾を刺したり、ときにはぐるぐると丸く巻いてついてみせ、「昔はこれで遊んだもの」とよく話してくれていたからだったが、糸だけのてまりはゴム玉のように弾まなかった。このあとまもなく、母は私に正月用の袖の長い着物を作ってくれ、それはどういう偶然か、紫地にてまりの模様だった。その着物を私はとても気に入っていたけれど、着るといつも何故か悲しくなり、ひとりでに動作もおとなしくなったのをおぼえている。

これが私の、てまりにおける最初の体験であって、この体験は身うちにしたたか刻みつけられ、年月経てのち、昔のてまりに是非ともめぐり会いたいと思い始めるのである。で、十年ほど前から私はデパートで開かれる全国各地の物産展をのぞきに行くようになり、そこに出ている何々てまりというのを買い求めて来るようになった。

てまりは、芯と糸さえあればどこででも出来るものだけに、日本全国ほとんど土地名をつけたてまりが出品されるが、私は買って来るたび、いつも違う、違う、と思い、その金糸銀糸のギラギラの、リリヤンの房をつけたてまりをそっと戸棚にしまい込む。そういう矢先、ある婦人雑誌の通信販売で

松本てまりを見、早速申し込んだところ、送られて来たものは私の祖母の、あの素朴な手作りに通じる味があった。模様は八重菊、赤黄緑のもめん糸でていねいにかがり、耳もとで振るとカラカラと幽かな音がする。じっと眺めていると、この大へん複雑な図柄を、一本一本糸を手繰りながらかがってゆく女の指先がそこに浮び、私は吸い寄せられるように松本へ行ってみたいと思った。松本へ行って、てまり作りのひとに会えばきっと昔の幼なごころが戻り、それはこのよろずオートメーションの索莫たる時代、何よりの安らぎではなかろうか、と思いつつ、その実現にはなおこのあと、四、五年もかかるのである。

松本で最初にお会いした上條八尾さんはことし八十一歳、まだとてもお元気で、ものごしの極めて上品な方である。

日本の家族制度にあって、どこの家でも家風は祖母が作るものといわれ、また子女の躾は祖父母の方針に任せられたという。上條さんの前に出ると、そのいわれがまざまざと思い出され、ひとりでに心がしんとなる。上條さんの生家は、もと士族のごく普通の家庭だったといわれるが、それでもこたつに入るには、一礼して許しを受けたあとも膝までは入れさせてはもらえなかったし、また女の子といえども極端に派手な装いを禁じられたという。

上條さんの立居振舞、言葉の正しさ、それに正座してまりをかがる間も手は八方に動いて、糸くずは糸くず入れへ、綿くずは丸めて一ケ所へ、と身のまわりを散らかさない心得には私など感嘆おく能わず、先ずこの精神の堅固さにあってこそ、かの質実美麗のてまりが生れたのだとうなずけるのである。上條さんの母君は手しごとの巧みなひとで、子供のためにさまざまの遊び道具を作って下さった

らしい。お正月が近くなると、家事のあいまにてまりの台をつくり、それに赤や青の糸をかけて休ませてあるのを見て上條さんは、

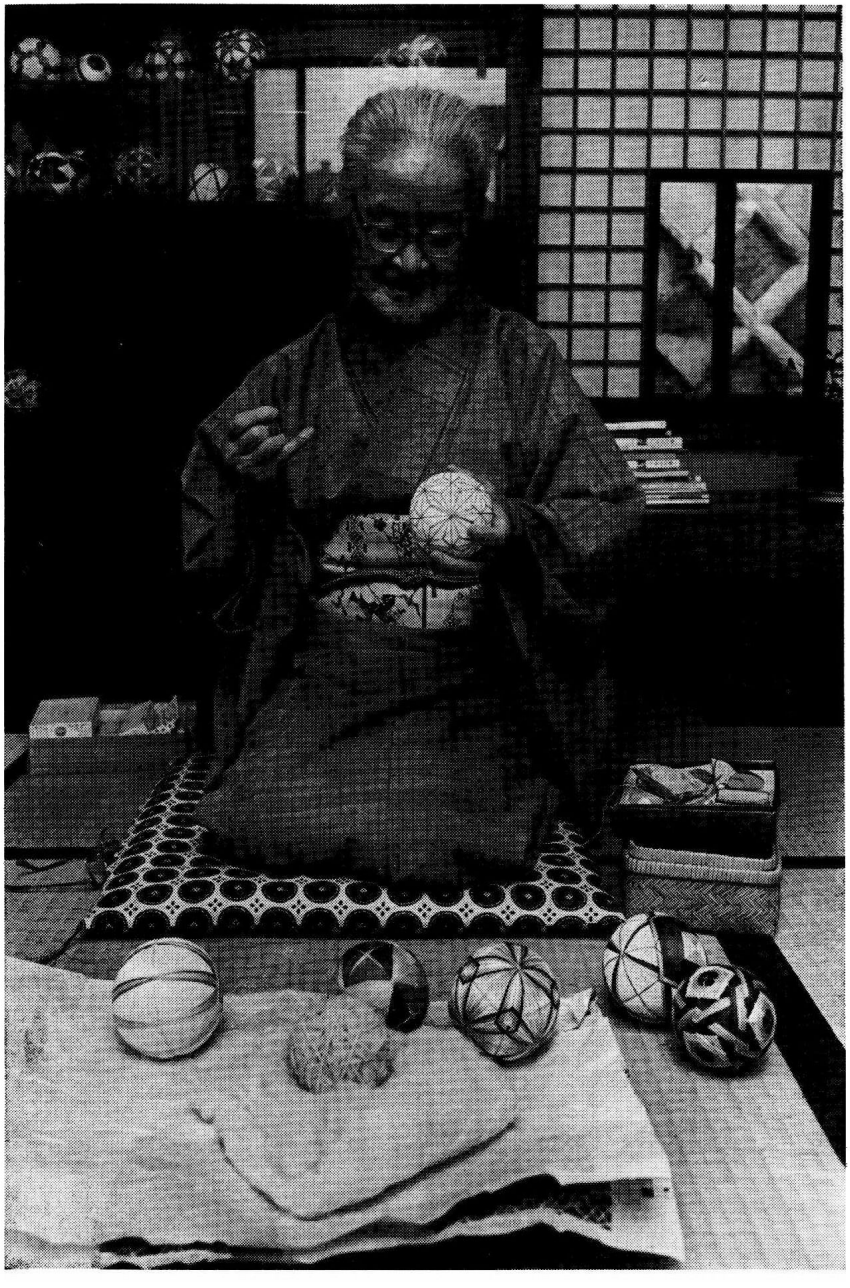
「ああ、早くできればいいのになあ」

と、それはそれは待ち兼ねたという。自分のために母親の作ってくれるてまりの、その糸のかけ休めの、仕上りを待つよろこびを上條さんはくり返し、「何とも楽しみでございました」といまでも嬉しそうに語るのである。

もちろんまだゴムまりはなく、やっと出来上ったてまりを大事に大事についても、はずみでころころと縁側からころがり落ち、泥んこの水たまりへでも落ちれば一切おじゃん、「ほんとうに泣きとうございました」と上條さんはいう。ゴムまりのように弾まない糸のまりは、息をはずませ、力をこめてついても、ものの三十センチほどしか上らないが、それでも他に遊び道具のない時代、色糸でかがった美しいてまりは子供にとって何よりの宝物だったことであろう。

上條さんが自分でてまりを作りはじめたのはずっとのちの終戦後のことで、年は五十歳近かったという。既に子育ても終り、気持にも余裕が生じたためもあるだろうが、長いあいだ好きで集めておいた糸を眺めているうちに幼い日の記憶が次第に鮮やかによみがえって来たことと思われる。最初に手がけたのは、母君に作ってもらったものと同じ麻の葉模様で一人で考え考え工夫し、模索しながらやっと作りあげたときのよろこび、しかし上條さんの満足度はここにとどまらず、こののち日々前進して技術をマスターしてゆくのである。

松本てまりの起りは、昔の松本藩士の子女が手なぐさみに作ったものといわれるだけあって、戦後



上條八尾さん

も、保存のよい家ではぽつぽつと持っていた人もあったらしい。機会あるごとに上條さんはその古いてまりを見せてもらい、また民俗資料館に展示してある品を一個ずつ借り出して来ては研究し、糸のかけかたを独習したという。

てまりというのは、球形の無地のものに十六方の位置を定め、糸をよじらさず、ゆるませず、ひきしめず、しかも配色よく等間隔にかけてゆかねばならないもので、私などのように粗雑な頭脳の持主は、何時間睨みつけていても糸のかけかたはとうてい判らない。人のまりを見てすぐ判るというのは、これはよほど幾何学的才能に恵まれた人というべきであって、終戦後の混乱の世の、しかも情報皆無のなかで一人工夫してはさまざまな形を生み出して行った上條さんの努力には驚かされてしまうのである。

現在民俗資料館にある古いてまりの模様は、遊星、束ねのし、八重桔梗(ききょう)、日の丸、麻の葉、亀田、八重菊、かすり、流星、八重づる桔梗、柳くずしの十一種だが、これはこれだけが極め付きの型かといえばそうではなく、人それぞれの工夫によって模様は無限に作られてゆくものであるらしい。げんに、上條さんの「花火」というてまりは、借り出したてまりを一晩中眺めまわしていてもどうしても判らず、空しく返したあとでふと閃(ひらめ)いて作ったものだという。

上條さんのてまりの特徴は、作品にある種の主張が見られることと、配色がまことに華麗であることがあげられようか。ご自分で、いちばん苦心するのは糸の配合ですとおっしゃっておられるとおり、糸の色は自由自在、思い切った取り合わせをみせているが、これは上條さんが子供の頃からずっと地味な着物ばかり着せられ、赤はまるで罪悪ででもあるかのようだった大人たちの認識への、一種の反

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com